

セクシュアル・マイノリティ 教職員研修



セクシュアル・マイノリティに関して、大学の教員・職員として知っておくべき情報や対応の原則などの理解を深めることを目的として、オンラインでの研修を行いました。大橋学長をはじめ、31名の教職員が参加しました。

ダイバーシティ推進室の藤山が講師を務め、セクシュアル・マイノリティに関する基礎的な知識、東京都パートナーシップ宣誓制度など近年の社会的な動向、本学における対応ガイドラインの概要、大学における対応の原則と留意したい点などについての講義を行いました。

参加者からは、「卒業研究のテーマで取り上げたいとする学生が定期的にいるので、知ることができてよかった」「今回の研修をきっかけに、アライとして行動していきたいと思いました」「定期的にお話を聞いて、改めて学び理解を深めること、近年の動向を知って知識をアップデートすることの大切さを感じました」などの感想が寄せられました。

一方で、「先生方も成績入力の忙しい時期なので、開催時期のご検討をいただけると有難い」と開催時期や時間帯について検討を求める意見や、「セックス」と「ジェンダー」の違いに触れてほしいなど、内容についての要望も寄せられました。寄せられた意見を踏まえながら、今後は参加者同士のディスカッションを取り入れるなど、形式の工夫もしながら、継続的に研修を実施したいと思います。(藤山)

「ロールモデル集 vol.2」発行のお知らせ

本学の大学院を修了し、企業や大学などで研究者や専門職として活動するOG7名に取材したロールモデル集『未来を拓く 東京都立大学ゆかりの女性研究者たち Vol.2』を発行しました。研究者や専門職として働くことの魅力や本学で学んだこと、実際のキャリアパス、学生へのメッセージなどを紹介しています。研究者や専門職という一つのことに取り組み続けるイメージが強いですが、美術科の教員として働き始め、今では作業療法学の研究者になっている方や、宇宙物理学を学んだ後に、スウェーデンの企業でソフトウェア開発者として働く方など、さまざまなキャリアを持つOGたちが登場します。研究者や専門職は決して特別な仕事ではなく、好きなことを追い求めることのできる素敵な仕事だということが伝わる内容になっています。ぜひWEBサイトをご覧ください。(藤山)



東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」

これまで都立大KIDSでは、本学の学生及び教職員のみを利用対象としてきましたが、このたび、多様な保育ニーズにお応えするため、本学の南大沢キャンパスで開催される学会などへ参加する学外の方もご利用いただけるようになりました。すでにいくつかの学会より、ご相談をいただいております。

利用方法など詳細は、本学所属のご担当者から、学長室またはダイバーシティ推進室へお問い合わせください。

東京都立大学ダイバーシティ推進室
一時保育施設のページ

https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/day_nursery/day_nursery.html



コラム ダイバーシティ・ブックレビュー (学長室 主任: 松村 裕介)

栗原 類 著『発達障害の僕が輝ける場所を見つけられた理由』 明石書店

近年、ニュース番組の特集やテレビドラマなどで取り上げられるなど、「発達障がい」という言葉を耳にする機会が増えてきています。発達障がいの方は生まれつき脳機能の発達に偏りがあり、得意と不得意の差が非常に大きく、その発達のアンバランスさによって人とのコミュニケーションが上手くとれず、日常生活や社会生活に困難をきたしてしまうことも少なくありません。

著者の栗原類さんは、モデル、タレント、俳優とマルチに活躍されていますが、発達障がいの一つであるADD(注意欠如症)と診断された当事者でもあります。この本では栗原さん自身の特性の説明とともに、生まれてから現在まで歩んできた半生を振り返って、障がいを持つが故の困難とどのように向き合ってきたか、未来を切り開いていったかが書かれています。

栗原さん自身の当時感じていた思いや、障がいを受け入れ全面的にサポートしてきた母親の考え方や信念、主治医の立場からみた発達障がいの子どもの接し方のアドバイス等は、発達障がいの理解を深める大きな助けになります。

障がいを持つ当事者と見守ってきた母親、第三者である医師と友人の4人の視点から、多角的かつ客観的な見解が得られるので大変わかりやすく、一読の価値のある良書であると思います。ぜひお手に取って読んでみてください。



編集 後記

今年度も無事に卒業入学シーズンを迎えました。学内やプライベートでも感染症対応のため不自由さや理不尽を感じる数年間でしたが、何ひとつ前向きなことなどないということ、日々の何気ない日常がいかにかに幸せであるかを知ることになりました。今を生きることの大切さを感じます。(兼子)



東京都立大学 ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 図書館本館1階
電話: 042-677-1337(直通) / 内線2571
E-Mail: diverwww@tmu.ac.jp
URL: <https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/>
発行日: 2023年3月31日

編集・発行

TMU
DIVERSITY
PROMOTION
OFFICE



No.34 March 2023 Newsletter ダイバーシティ通信

東京都立大学

2022年度文化的多様性を持つ構成員交流会

いけばな体験会



の大ぶりな花器に、花開いた桜を中心とした、とてもゴージャスな作品を作り上げていきました。一つひとつの草花が生けられていくごとに、全体のようなすも大きく変化し、短い時間の間に新しい空間が誕生するような、そんな不思議な気持ちを感じました。

講師によるデモンストレーションの後は、3グループに分かれて作品制作に取り組みました。それぞれのグループが楽しそうにコミュニケーションをとりながらコンセプトを決め、助手の皆さんの協力や講師の指導を得ながら、時に基本に忠実に、時に思い切ったアイデアで草花を生け、そこに新しい空間を生み出していました。

完成した作品を前に、各グループの代表が作品のコンセプトや込めた思いなどを発表するプレゼンテーションタイムとなりました。参加者はそれぞれ、「サンシャイン」「変化」「空」などのキーワードで、自分たちの作品に込めた思いを語っていました。

最後に、作り上げた作品とともに記念撮影を行い、交流会は終了となりました。使用した花を持って帰る参加者や、参加者同士で写真を撮り合い、連絡先を交換する様子なども見られ、盛況のうちに会を終えることができました。

参加者からは、引き続き、日本文化を体験できるようなイベントの開催を求める声が寄せられています。今後も、さまざまな方法で文化の体験とそれを通じた参加者の交流を促進するようなイベントを開催できればと思います。(藤山)



Contents

1
2022年度文化的多様性を持つ
構成員交流会
「いけばな体験会」

2
学生支援スタッフ振り返り会
／勉強会
障がいのある学生支援/
2022年度総括
寄稿「2023年春、卒業を迎えるにあたって」
寄稿「PEPNet-Japanの発表を通して」

3
南大沢キャンパス バリアフリー
チェック講習会報告
コラム「ダイバーシティとスポーツ」

4
セクシュアル・マイノリティ
教職員研修
「ロールモデル集 vol.2」
発行のお知らせ
東京都立大学一時保育施設
「都立大KIDS」
コラム「ダイバーシティ・
ブックレビュー」

学生支援スタッフ振り返り会／勉強会

2月16日(木)に、学生支援スタッフと共に聴覚障がいに関する勉強会と後期の振り返り会を行いました。聴覚障がいに関する勉強会では、パソコンテイクの養成講座などでは抜けがちな聴覚障がいに関する医学的な特徴や聞こえ方に関する勉強を行いました。

当日はそれらの勉強を踏まえたくて、聴覚障がいのある学生も参加していたことから、日常生活における困りごとや聴力について質問をすることで、聞こえに関する理解を深めることが出来る様子が見受けられました。次年度以降のパソコンテイクではどのような点に留意しつつ情報支援を行えばよいのか、といったことについて改めて考える機会となりました。

その後の支援活動の振り返りにおいては、今年度の活動の中で各自の感じたことや課題について共有をしたうえで、次年度の活動に向けた方針の確認、また学期始まりの動きについて確認をしました。

それらの中では、「授業と重複することが多く講習会への参加がなかなかできない」「バリアフリーチェックなど、所要時間のかかるものについては平日にコンスタントにやるか長期休暇にやる方が良いか、判断が難しい」といった声などが挙げられていました。



次年度以降も継続して「より良い支援とは何か」について考えつつ、学生たちと活動を継続していきたいと思えます。(益子)

障がいのある学生支援／2022年度総括

今年度の学生支援スタッフの活動では、ここ数年の活動の中心が聴覚障がいのある学生への支援であったのに対し、それ以外の活動にもエネルギーを費やした1年でした。例えば、新入生説明会からよるダイバー、ダイバーシティウィークでのバリアフリーチェックの成果報告、青鳩祭への出展などです。これらの活動のシフトは、授業支援を中心に利用していたろう学生の卒業と共に、学生支援スタッフの活動を維持・継続するための取り組みでもあり、また、新たに支援を要する学生が出てきた場合にどういった配慮が求められるのかを考えさせられる貴重な機会でもありました。そして、聴覚障がいのある学生への支援においては、その技術の継承・発展のためにも様々な活動を行ってきました。例えば、パソコンテイク養成講座の定期的な実施だけでなく、PEPNet-Japanのシンポジウムでの報告であったり、手話動画辞典の開発があります。

手話動画辞典の開発では、手話者であろう学生が卒業すると共に、大学の中で手話技法をどのように継承するのかといったことから着想したものです。また、3月21日には卒業式においてパソコンテイクによる情報支援も行いました。captiOnlineを用いることで、スマートフォンで話している内容について確認できるような体制を取りました。次年度以降も、障がいの有無に関わらずよりよい大学生活を送るためにはどのような活動が出来るのかといったことについて考えつつ、学生たちと共に活動していきたいと思えます。是非応援をよろしくお願いいたします。(益子)



南大沢キャンパス バリアフリーチェック講習会報告

今年度のバリアフリーチェック講習会は、南大沢キャンパスの理系エリア(8,9,11,12号館)にて行いました。このイベントは、主に2つの要素から構成されています。1つは、物理的な障壁の有無を確認するチェック作業です。そしてもう1つの要素には、学生支援スタッフが日々利用する大学内を点検し、物理的な障壁をチェックする中で、ユニバーサルデザインな公共施設のあり方やその物理的な障壁の除去に必要な視座を獲得することを目的に行っているものです。

前回行ったバリアフリーチェック講習会では、主に1号館や6号館など、文系エリアを中心に行っていたのに対し、今回の理系エリアの調査は、普段なかなか踏み入れたことがない学生や、研究活動のため通い詰めている学生まで参加し、チェックを行いました。

企画の中心となる学生支援スタッフたちには事前にバリアフリーチェックに関する知識などについて理解を深め、当日は彼らを中心に企画を進めました。

8,9号館は他の建物と比較しても高層の建物となっており、理学部や都市環境学部が主に使っている建物です。エレベーターでそれぞれの階へ移動する形になっている建物で、大きな吹き抜けと、2F以上の階は廊下の通路が狭く設計されているのが特徴です。

今回の調査では、エレベーターが稼働しない状況において、どのように障がいのある構成員が避難を行うのか、といったことが改めて課題として明らかになりました。

また、バリアフリートイレの作りなどにおいても、元々の建物の設計に対し、後からの改修で設置された部分などがあり、車いすユーザーの学生たちにはやや使いづらさが伴う施設も見受けられました。

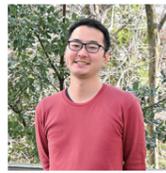
そういった点について、都市環境学部の学生や健康福祉学部の学生と共に「どう設計したらよかったかな」「どう解消したら良いと思う?」と話しながらこの作業が出来たことは重要な機会であり、また報告書の執筆の段階では、最新の規格や改修の際に有用と思われる手立てについても議論することで、学生支援スタッフと共によりよいキャンパスの環境とは何かという事について考えることが出来ました。

今年度同様、この成果については次年度に報告会を行いたいと考えており、またこの講習会で作られているチェック項目については、学外のみなさんにも公開できるように現在準備を行っている状況です。もし、ご関心のある方がいらっしゃれば、当室までご連絡をいただければと考えておりますので、どうぞよろしくお願い致します。(益子)



「2023年春、卒業を迎えるにあたって」

私がダイバーの活動に参加しようと思ったきっかけは、『自分の得意分野であるパソコン技術を活かすことで、誰かの手助けになるなら、それは良いことだと思ったから』という、至って平面的なものに過ぎませんでした。そこからの数年間は、自分が何も貢献できずに迷惑ばかりかけてしまっている一人だと思い込んで落ち込み、全く活動に参加していませんでした。しかし、そんな時を経つつも再びダイバーの活動に飛び込んだ経験は、いまの私を構成する大きなピースの1つを作ってくれたように思います。



そんな私がこれからも大事にしていきたいと思う考え方の一つが『障がいや病気の有無、ジェンダーの捉え方などに関係なく、自分も相手も同じ一人の人間だということ』を忘れないということです。これは、とても当たり前なことのように、しかし以前の私にとってはあまり意識できていなかったことの一つでした。そして、ダイバーで様々な経験をすることで、誰だって嬉しかったら笑うし、悲しかったら泣くはずだというように、そんな『当たり前』に改めて気が付いたことは、私の人生において非常に重要な変化だったなと思えます。未筆になりましたが、お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

学生支援スタッフ
都市教養学部理工学系
電気電子工学コース4年 中村征矢

「PEPNet-Japanの発表を通して」

PEPNet-Japanに参加して、印象に残っていることが2つあります。1つ目は、他大学の支援活動について知ることが出来たことです。今回は愛知教育大学と宮城教育大学の発表を聴くことが出来ました。教育大学、しかも、東海と東北の大学の話を一度に聴ける機会は今までなかったため、貴重な機会でした。パソコンテイクでは何を心掛けているのか、講義中、即時性が求められる問いかけが支援学生に当てられた場合、支援者はどのように行動すべきかといった話題について、各大学で考え方は様々でした。こうした気が付かなかったような視点を得られたことで、思考の幅や範囲が広がりました。



2つ目は、「東京都立大学ならではの活動とは何か?」について考える場になったことです。ダイバーシティ推進室では、障がいのある構成員支援以外にも男女共同参画の推進、多文化共生への取り組みというように、多様な視点から活動しています。今回のテーマは「聴覚障がいのある学生への支援の取り組み」でしたが、バリアフリーチェックややるダイバーなどを交えながら発表しました。こうした多面的に考えられる都立大ならではの取り組みに、参加者の方々が興味をもってくれたことは嬉しかったです。緊張しましたが、普段会えないような他学年のスタッフと話すきっかけにもなり、楽しい思い出になりました。皆さんも参加してみてください!

学生支援スタッフ
人文社会学部人文学科3年 高ほのか

コラム ダイバーシティとスポーツ 〜東京パラリンピックのあと〜

日本パラスポーツ協会は「パラスポーツの振興・共生社会の実現に係わる意識調査」を実施しました。この調査は、東京パラリンピック開催前の2021年7月と、開催直後の2021年9月、そして開催1年後の2022年7月に行われたものです。まず「パラスポーツ」そのものの認知度は、大会直後の2021年9月調査では33.7%でしたが、その前後の調査では、いずれも20%程度でした。「パラスポーツのイメージ」や「障がい者についての考え」も、大部分で同じような傾向を示しています。また、「障がい者を取り巻く社会の変化」については、2021年7月と2022年7月の数値を比較した場合、「否定的な意見が減少した」「差別的な行動が減少した」という回答が3ポイントほど増えましたが、その他の項目については、おおむね2021年7月と2022年7月とで変化はありません。なにより、「東京大会後に障がい者スポーツに関して行ったこと」の設問では、「行っていない」が52.5%で最も多かった一方で、「障がい者と一緒にスポーツ活動を行った」や「障がい者のスポーツ活動に関わった」など、何か社会的な行動につながったという回答は2%前後となっています。この調査結果からは、パラリンピックを通じてパラスポーツへの注目や、それによる障がいへの社会的な関心の高まりなどは、一時的なものにとどまり、パラリンピックを通じて社会の変化には、思うようにはつながらなかったことが理解されます。大規模なスポーツイベントを通じて、競技への関心を高め、普及や振興につなげるといった大義名分は、しばしば聞かれるところですが、現実的には大変困難であることがうかがえます。パラスポーツの普及や障がいに対する社会的な関心の高まりについても、大規模なイベントに頼るのではなく、社会の変容を促す地道な取組を続けることが、まずは大事になるでしょう。その土台があつてこそ、パラリンピックなどのイベントが効果を発揮するのではないのでしょうか。(藤山)